

# 序

千葉大学長  
横手幸太郎

千葉大学は、1949（昭和24）年に新制大学として発足し、この度、2024（令和6）年に創立75周年を迎えた。そして、これを機に、「三十年史」、「五十年史」に続いて、「七十五年史」を編纂することとなった。

現在、我が国では、少子化と人口減少が進む中、社会が発展を続けるための道筋が模索されている。また、海外へ目を向ければ、ウクライナやガザ地区など国家・民族間の争いが絶えず、さらには環境破壊や温暖化、災害の頻発・多様化など、地球規模で解決すべき課題も数多く存在する。一方で、AIに代表される新たなテクノロジーや学問の進歩は、人類にとって希望であり、持続可能な社会への貢献が期待されている。

千葉大学は、「つねに、より高きものをめざして」の理念のもと、そのような時代や環境の変化に対応して課題解決に貢献できる人材を育成し、地域社会はもとより「世界に冠たる千葉大学」として世界の中で存在感を示し、輝かしい未来を牽引し、選ばれる研究大学となることを目指している。

1949年5月31日、千葉大学は、千葉県内にあった千葉医科大学、同大学附属医学専門部及び薬学専門部、千葉師範学校、千葉青年師範学校、東京工業専門学校、千葉農業専門学校等の7つの旧制国立諸学校を包括して、新製の国立総合大学として発足した。当初は、5学部（学芸学部、医学部、薬学部、工芸学部、園芸学部）と1研究所（腐敗研究所）からなっていたが、その後、幾多の組織改編、拡充改組が行われ、75年後の2024年現在、4月に誕生したばかりの情報・データサイエンス学部及び大学院情報・データサイエンス学府等を含め、11学部、19大学院、20を超えるセンター等の附属機関を擁する国内有数の国立総合大学に発展し、幅広い教養と高度な専門性を習得できるアカデミア環境を備えている。

前著『千葉大学五十年史』の刊行は1999年であった。それ以降、すなわち21世紀の最初の四半期にほぼ合致する25年を振り返ってみたい。この期間を語るうえでは

ずせないキーワードとしては、「国立大学の法人化」、「外部資金の獲得」、「グローバル化」の3つが挙げられよう。

まず、2004年に行われた「国立大学の法人化」は、この間に経験した最も大きな変革であった。自由で自律的な大学運営を可能にした反面、運営費交付金の削減が始まり、経営面で大きな課題を全国の国立大学にもたらした。千葉大学も厳しい財政状況に対峙することを余儀なくされ、これまでに幾多の試行錯誤を続けてきた。

運営費交付金の削減に付随して、科学研究費補助金その他、間接経費のある「外部資金の獲得」が各大学にとって重要となった。千葉大学では、2003年の21世紀COEに始まり、大学院教育GP（2007年）、グローバルCOE（2008年）、リーディング大学院（2012年）、卓越大学院（2019年）など、さまざまなプログラムで補助金を獲得してきた。さらに、「千葉大学基金」などでご寄付の呼びかけも強化しているところである。まさに、大学一丸となって、外部資金獲得に取り組んできたと言える。

そして、「グローバル化」である。千葉大学は、海外大学との交流を促進し、大学間および部局間協定校を増加させ、2010年以来多くの世界展開力強化事業の補助金を獲得した。また、2014年にスーパーグローバル大学に選定されたことを皮切りにグローバル化を一層推進し、2016年には全員留学を掲げた国際教養学部を設置、さらに、2020年には、全員留学を全学に広げるグローバル人材育成プラン（ENGINE）をスタートさせた。この間に、3つの海外キャンパスも整備している。

一方で、この25年間には、危機管理の面でも2つの大きな出来事に遭遇した。1つは2011年の東日本大震災であり、もう1つは2020年に始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックである。これらは、教育研究機関である大学にとって、災害対策、感染症対策が喫緊の課題であることを突きつけるとともに、社会の変容に合わせ、教育・研究においても、オンラインによる授業や会議など新たな方法を模索しながら大学を運営していく必要があることを認識させた。

千葉大学では、法人化の後、2005年に大学憲章を制定し、「つねに、より高きものをめざして」という理念のもと、世界を先導する創造的な教育・研究活動を通しての社会貢献を使命とし、生命のいっそうの輝きをめざす未来志向型総合大学として、たゆみない挑戦と改革を続けてきた。ここからは最近の取り組みについてご紹介する。

まず、世界最先端の研究を展開すべく、世界と伍して飛躍的な展開が期待される先鋭的な研究を支援するとともに、研究の進展を通じて、次世代を先導する中堅・若手研究者の育成を支援することを目的として、国際高等研究基幹を設置した。科学研究

費補助金の獲得増による個人研究の一層の活性化を図るため、学術研究・イノベーション推進機構（IMO）の研究支援の強化も進めている。

また、世界に学び世界に貢献する人材を育成するという観点から、国際未来教育基幹の再編を行い、基幹内に高等教育センターを設置した。これにより、高等教育の最新動向の調査研究や教育IR（Institutional Research）に基づいた教育改革方針を定めるとともに、学生のニーズや千葉大学の強み・特色を生かした「多様で柔軟なプログラム」を創出し、新たな価値の創造や社会にインパクトを与える革新を生み出すイノベーション人材の育成を目指している。

さらに、運営基盤を強化し、持続的な発展を導く大学経営を行うため、経営戦略基幹を中心に、中長期的な経営戦略についてエビデンスに基づいた検討を行っている。2022年には文部科学省「国立大学改革・研究基盤強化推進補助金（国立大学経営改革促進事業）」に採択され、デジタル・トランスフォーメーション（DX）を踏まえた大学改革を実現していく。情報・データサイエンス学部及び大学院情報・データサイエンス学府の設置もこの一環である。

千葉大学ブランドを高める広報活動も強化している。各分野における最先端の研究や研究者の活動をわかりやすく発信する研究ウェブメディア“CHIBADAI NEXT”を創設した。教育、行政、産業、医療など各分野の皆さま、地域コミュニティーなどとの幅広い連携を通じて社会へ貢献し、地域におけるステータスを向上させ、社会から信頼され、親しまれ、誇りとされる千葉大学を目指していく。

そして、外部資金の獲得という面でも成果が出ている。2022年、日本医療研究開発機構（AMED）「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業」において、千葉大学がシナジー拠点として採択された。そして、2023年には、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に採択されている。これは、千葉大学が、免疫学・ワクチン学研究、予防医学研究等の強みや特色ある研究領域において、学び、研究し、イノベーションを創出する場として国内外の学生や研究者に選ばれる大学となることを「10年後の大学ビジョン」として掲げ、これらの研究領域を戦略的に強化し、成果の社会実装に繋げる取り組みである。その上で注力すべきは、それらの取り組みを学内に横展開し、本学全体の中長期的な発展を目指すという点である。2024年度から本格的に活動を開始しており、その実現に努めたい。

新たな取り組みとして、このほかに、墨田サテライトキャンパスのオープン、災害治療学研究所の設置、新たな国際教育プラットフォームの構築や包括的連携・協力等に関する協定締結の推進、東京大学生産技術研究所の跡地取得のための土地交換契約

とそれに伴う西千葉キャンパス地区計画の策定など、さまざまな活動を進めている。

この間を通じた教職員や学生の活動が評価されてのことであろう、2024年度入試の時点で、千葉大学は9年連続国立大学志願者数全国1位となっている。受験生、保護者、高校や予備校の先生方から一定の評価を得ているものと素直に喜びたい。これからも、つねに、より高きものをめざして、世界から見える魅力ある大学、選ばれる大学となるべく、一步一步前へ進んでいきたい。

この『千葉大学七十五年史』には、最近25年間を中心に国立総合大学としての千葉大学の歴史が記されている。千葉大学は、今までどう歩んできたのか。そこから、我々は何を見出すか。そして、これからどう進んでいけばよいか。

かつて、創立30周年にあたり、第7代 香月秀雄学長は、「焦らず、急がず、止ることなしに、千葉大学を大学たらしめる為の着実な歩みをわれわれはすすめて行きたい」（『千葉大学三十年史』序）と述べられた。また、創立50周年に際して、第11代 磯野可一学長は、「大学に求められる不易の部分を見つめ、自らの責任に於いて、教育・研究の改善と向上を図り、明日に向かって育ちゆく有為の人材を育て、真理を求め、社会に、そして人類の幸せのために、大きく貢献するために尽力することを誓おうではないか」（『千葉大学五十年史』序）と書かれている。

我々のこれまでの歩みを、お二人の先輩方がどのようにご覧になっているか、わからないが、ただ、千葉大学がこの期間に、教育と研究、そして、近年、特に大学に求められるようになった社会貢献の面でも存在感を増してきたことは確かであろう。

冒頭で述べたように、現在千葉大学は、11の学部と19の大学院、20を超えるセンター等を擁する。その一つ一つが独自の歴史を持ち、個々の活動を進めている。今後、それぞれの特色と強みをさらに伸ばしながら、横断的な連携・協力も密にし、総合大学としての特長を最大限生かし発展していくことを期待したい。そのために、学長として、私自身も精一杯努力する所存である。そして、発展へ向けた原動力となるのは「人」であり、学生も教職員も、誰もが自分らしさを追求でき、人を豊かにする魅力あふれる千葉大学を、来るべき創立100周年へ向けて、皆で力を合わせて実現していきたい。

なお、『千葉大学七十五年史』を編纂するにあたり、全学の教職員の方々に多大なご協力を仰いだ。75周年事業全体を統括いただいた中谷晴昭理事、本学OBとして年史作成の先頭に立って下さった渡邊誠前理事、竹内比呂也附属図書館長を委員長・主

査とする編集委員会・通史編集専門部会の委員の方々、長澤成次名誉教授をはじめとする年史編集室の方々、そして、原稿を執筆いただいた学内外の方々、さらには、この活動を支援していただいたすべての皆様に、心からの感謝を申し上げます。最後に、『千葉大学五十年史』以降に、第12～15代の学長を務められた古在豊樹先生、齋藤康先生、徳久剛史先生、中山俊憲先生に敬意を表して筆をおきたい。